

津田源右衛門殿
多賀左近殿

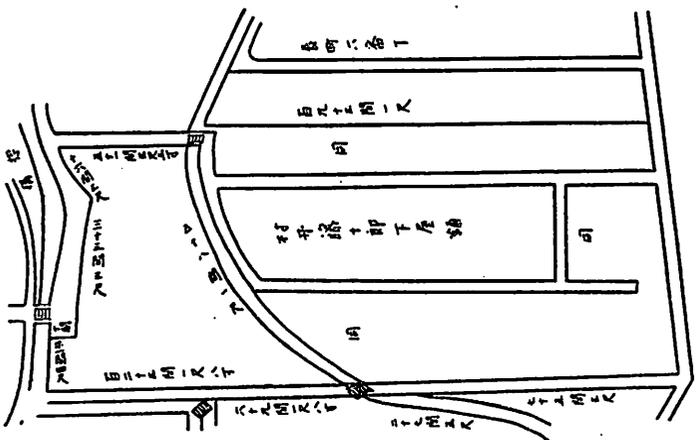
右の外天和三年の由緒帳もあり。兩由緒書に據つて参考するに、其の祖先是、關東の武士にて姓は丹比氏なり。曾祖室孫三郎中國へ上り、備中國英賀郡中津井といふ地千石許領知す。孫三郎が父は室大和守とて、尼子義久に奉仕す。大和守歿後、孫三郎義久の子息晴久に奉仕す。其の頃尼子氏、毛利家と合戦に及び、美作國高田の城攻に孫三郎討死す。祖父も孫三郎と稱し、尼子晴久に奉仕す。尼子氏滅亡の後、宇喜多中納言殿の一家備前小倉の城主伊賀久隆の旗下と成り、慶長五年關原合戦の時浪人と成り、寛永七年十月備中國中津井にて歿す。父玄朴は或は玄卜とす。江戸へ出で醫者と成り、母は蜂須賀阿波守殿家士平野又右衛門娘也。順祥は、生國武藏、寛文十二年二月十八日十四歳にて前田家へ被抱、奥小姓組にて口粗二十人扶持賜はり、貞享元年十二月十九日百五十石賜はり、元祿三年九月廿六日五十石を加恩、二百石賜はる。同十年四月朔日組外組と成る。正徳元年三月十五日幕府の儒士と成り、江戸駿河臺に

邸地を賜ひ、享保十九年八月十二日七十七歳にて歿し、武州豊嶋郡大塚村に葬ると云ふ。

○村井豊後守邸跡

右藤十郎は、元祖豊後守長頼の五世の孫にて、後に出雲親長と稱し、寶永六年叙爵して豊後守を拜任す。按ずるに、元祖豊後守長頼は城内に居住す。有澤武貞の金澤細見圍踏に、三丸異風稽古所の地は、村井豊後守長頼の屋敷にて、天正十二年末森役の砌も早く一左右を開届けたる咄あり。後は今の権現堂の地に村井氏居住す。といへり。今按ずるに、三壺記に、天正十九年十一月利家卿金澤へ下向せられ、其の頃西丸に村井豊後居て、御成を願ひ、則被爲成。と見ゆ、陳善錄に、金澤西丸に村井豊後城代してある頃、利家卿京より下向し給ひ、八月六日に御成ありたるよし記載す。有澤永貞の頭書に云ふ。金澤城西丸初めは村井豊後今の二丸の内に居住之由。次第に城内廣くなるに付、今の権現堂の建ちたる所村井氏屋敷之由。といへり。慶長の金澤城圖に、権現堂の地を村井出雲と記載す。松雲公夜話錄に、天徳院殿御在世の内、金澤大火城内焼失の時、只今御官有

延寶合葬圖



之所に、春香院殿の御殿有之、天徳院殿、此の御殿へ立退給ふ云々。とあるは、元和六年十二月二十四日夜の事也。春香院殿は、利家卿の第七女にして、慶長十年に村井出雲長次へ入興し、その室家と成給へり。長次は長頼の嗣子也。城内より諸士城外へ居住を命ぜられしに付き、長町の邸地を賜はり、夫れより世々居住すといへども、明治廢藩の際家屋を毀ち退去せり。然るに明治七年二月士族長谷川準也・大塚志良兄弟の發意にて、右舊邸地に、上野國富岡製糸場に模擬し、機械運轉の水車を以て、百人用の製糸場建築の事を縣廳へ出願し、同年三月許可を得、二百名の社中を募り、村井の舊邸地を買入れ、秋八月に至り建築落成し、諸機械全備の上開業式をなし、益々奮勵名聲を得たるに依りて、明治十一年十月天皇北陸道御巡幸金澤御駐轡中觀覽あらせられ、發起人長谷川準也・大塚志良を御賞譽あり。且製糸・繰糸・銅器の三社へ金百圓を下し賜へり。次いで同年十二月願に依つて官金二萬圓の拜借を命ぜられしかど、此の後負債に追はれ、遂に營業を廢したり。

○村井豊後守長頼傳